紀　　要

第　22　号

２００９．３

財団法人滋賀県文化財保護協会

城に見る水口の中世から近世
―美濃部氏城館・水口岡山城・水口城―

木　戸　雅　寿

1．はじめに

1300箇所[1]を越える近江の城郭の中でも、その一割を占めるとおり、甲賀郡の城はずば抜けて数が多い。また、城跡の保存状態もずば抜けてよい。これらは「むらの城」の名のとおり、廃城後も里山として守られてきた結果である。

「むらの城」の名の所以は、中世における「甲賀郡中惣」という特異な自治組織の形の現れでもあった。その中心的役割を果たしてきたのが、甲賀衆や甲賀武士と呼ばれた在地領主である。ややもすれば忍者の代名詞に成りつつある彼らであるが、彼らは半農半武の立派な武士である。これらの城は彼らの館であり、地域の守りの要として築かれていた[2]。それらはあたかもネットワークを組むがごとくである。このことは以前に述べたとおりである。彼らは惣中の掟を最大限に生かしながら、古来からの役目であった「鈴鹿警固」（国境）や「路次警固」（街道・道）を主たる職務としながら、地域の支配を行ってきたのである。個の守りと地域の守りを重視する考え方は、城の構造に強く反映されており、城は城館を主体とするものが多く、城の機能を重視した山城形態のものは地域的核となる場所以外に認められず、大字単位の在地領主の城には認められない。

しかも、これらの城が活躍したという記録はない[3]。彼らの仮想敵は伊賀惣国一揆や横領しようとする守護六角氏、近江支配や天下布武を押し進めていた織田信長であったが、記録やその後の状況から、甲賀郡全体の様相としては、いずれも大きな戦闘を迎えることなく新しい時代へとの恭順を図って生き延びていったようである。織田軍による甲賀の総焼き討ちは伝説ともいえるもので、歴史的には大きなものではなかった。つまり、織田信長は甲賀郡にはあまり興味を示さなかったのである。しかし、その甲賀郡が新たに重要な位置を占めてくるのが豊臣政権である。その中心的位置を占めたのが水口という地域であった。

本稿ではこれらのことを踏まえ、中世・織田段階・豊臣段階・徳川段階の築城のあり方から見た水口の状況を検証し、築城状況から見た甲賀郡における各時代における水口の重要性と地域の様相からみた中世から近世への胎動をとらえたい。

2．美濃部郷から水口郷へ

『水口町志』[4]によると、水口という名称には、①この地の開発の祖であった水口神社の祭神でもある大水口宿禰命の名に由来する。②水口神社祭神大国主命（大己貴命）が神田に蝗が発生したときにも水口の祭りをして防いだことに由来する。③横田川の水口を設けていたことに由来する。などの説があげられている。これらはいずれも水の口としての意味合いを持ち、地名としての水口郷の名は室町期に成立するとされている。残された文献からは、古代にあってこの地は山直郷（『延喜式』）に属しており、後に美濃部郷となり、菅原氏の荘園として栄えていたとされている。中世にあっては聖護院門跡の蔵田荘にも属し、その後に水口郷となったと考えられている。このように水口と美濃部、どちらが先かは明確ではないが、中世におけるこの地の出発点は、歴史的に見て美濃部であり、在地領主美濃部氏の領地であったようである。

3．甲賀武士美濃部氏とその城館

（1）美濃部氏の出自について

美濃部氏に関わる文献資料（表1）は少ない。そこから、順序立てて美濃部一族の構成や動向をうかがい、その全てを明確にすることは出来ない。ここでは、郡史、町誌に述べられていることを中心に整理しておきたい。まず、その出自である。出自の伝承は、伝承年代に問題があるが、天満宮に伝わっている『美濃部天満宮社記』に詳しい。それによると、延喜元年（901）２月25日に起こった「昌泰の変」で菅原道真が失脚して大宰府に左遷になった時、一族や側近も同時に失脚し、その時に京を追われた５男（４男としている書物もあるが、５男が正しいと考えられる。）の菅原淳茂が、菅原氏の荘園であった美濃部郷梅ヶ畑の郷長、平左兵衛門為親の屋敷に逃れ娘婿となり、一子菅原三郎直茂をもうける。淳茂は延長元年（923）５月赦免となり帰洛することとなったが、子の直茂は美濃部に残り小字武島に居宅を構え、姓を地名の美濃部に代えて在地領主となった。ただし、正式な菅原氏の家系図には、淳茂の名はあるが、子の所には直茂の名は無い。これらは落胤伝説である可能性もある。それはさておき、淳茂は逃れていた時の延喜３年（903）に、父の死の冥福を祈るため心光寺を建立したとされている。心光寺は現在天神町に位置しているが、寛永10年（1633）水口城築城に際し、現在の地に移転してきたものである。この時、木像を造り氏神として「美濃部天神」を祀った。このことから、美濃部氏代々の菩提寺となっている。そして、淳茂は帰洛後の延長４年（926）２月25日に61歳で没する。その子直茂は、天慶３年（940）に父の建てた天神社に社殿を造営した。このように、伝承では美濃部氏は菅原氏の末裔という出自を持っている家系である。家紋は「菊に斧」と「梅鉢」である。

（2）中世における甲賀武士美濃部氏

出自にまつわる伝承が途切れた後、最初に文献に現れる

表1

元　号	西　暦	月	日	人物名	年齢	事項	典籍
仁和　3年	871			菅原淳茂	0歳	菅原道真（42歳）の5男として産まれる	水口天満宮伝記
寛平　3年	891	2月		菅原道真		蔵人頭になる	
延喜　1年	901	1月	25日	菅原淳茂	30歳	昌泰の変で父道真、大宰府に左遷。それとともに京を追われ、菅原氏の荘園であった、甲賀郡水口号梅ヶ畑の郷長平兵左衛門為親の家に逃れる。	水口天満宮伝記
延喜　3年	903	2月	25日	菅原淳茂	32歳	父道真（59）の死にあたり、父の木像を造り氏神として安置し美濃部天満宮を造る。 父の冥福を祈るため心光寺を建立	水口天満宮伝記
延長　1年	923	4月	20日			故菅原道真、本管右大臣に位して正二位を賜り、左遷の詔書を破棄する	日本紀略
延長　1年	923	5月		菅原淳茂	58歳	父の赦免により、複官。一子菅原直茂を残し帰洛。小字武島の居館は直茂のものとなる。	水口天満宮伝記
				菅原直茂	不明		
延長　4年	926	2月	25日	菅原淳茂	61歳	菅原淳茂没	
天慶　3年	940			菅原直茂	不明	父のために、天満宮社殿を造営	水口天満宮伝記
断						絶	
建武　4年	1337	4月	25日	三乃辺兵衛三郎		「山中道俊、同頼俊軍忠状案」	山中家文書
				美濃部兵衛三郎元茂		祠再建	
文明　3年	1471	1月	23日	美濃部		六角高頼蜂起の与力	応仁紀
長享　1年	1487			美濃部源吾			甲賀古士由緒書
				美濃部源吾			佐々木南北諸氏帳
大永　3年	1523	6月	27日	美濃部大谷茂国		「美濃部大谷重国徳政落居契状」	山中家文書203
天文　7年	1538			美濃部六郎右衛門尉		「美濃部・武島公事申合条々案」	山中家文書206
天文10年	1541	7月	21日	美濃部殿		「山中久俊起請文案」	山中家文書209
天文22年	1553	3月	8日	美濃部米田茂在		「美濃部米田茂在田地売券」 「美濃部米田茂在徳政落居契状」	山中家文書212 山中家文書213
天文23年	1554	3月	14日	美濃部富河		「盛右衛門尉昌俊等連署異見条々」	山中家文書216
永禄　5年	1562	2月	24日	美濃部久野茂良		「美濃部久野茂良田地売券」	山中家文書223
永禄　5年	1562	4月	2日	美濃部久野茂良		「美濃部久野茂良徳政落居契状」	山中家文書224
永禄　8年	1565	6月	29日	美濃部惣		「山中・伴・美濃部各惣起請文」	山中家文書232
永禄　9年	1566	12月	15日	美濃部同名中惣		「山中・伴・美濃部三方惣起請文申合条々案」	山中家文書235
永禄10年	1567	12月	18日	美濃部大谷（子）		「奉行中惣起請文」	山中家文書238
				美濃部源助茂忠（親）			
元亀　2年	1571	11月	28日	美濃部六郎左衛門尉茂俊		「美濃部茂俊徳政落居契条」	山中家文書244
元亀　4年	1573			美濃部上総介茂濃（親）	信長・秀吉 家臣	「美濃部上総茂濃徳政落居契条」 「美濃部上総濃田地売券」 家康の伊賀越えの道案内をし後に徳川の家臣となる。	山中家文書246 山中家文書247
				美濃部上総介地茂（子）	信長・秀吉 家臣		
				美濃部源助茂光		布袋塚伝説	
慶長　5年	1600			美濃部金吾	秀吉 家臣		
慶長10年	1605	1月	15日	美濃部茂廣（親）・茂忠（子）		父茂廣が没ししたため、茂忠が家督を継ぐ	寛政重修諸家譜
元和　6年	1621	2月		美濃部同名中		鰐口紀年銘	

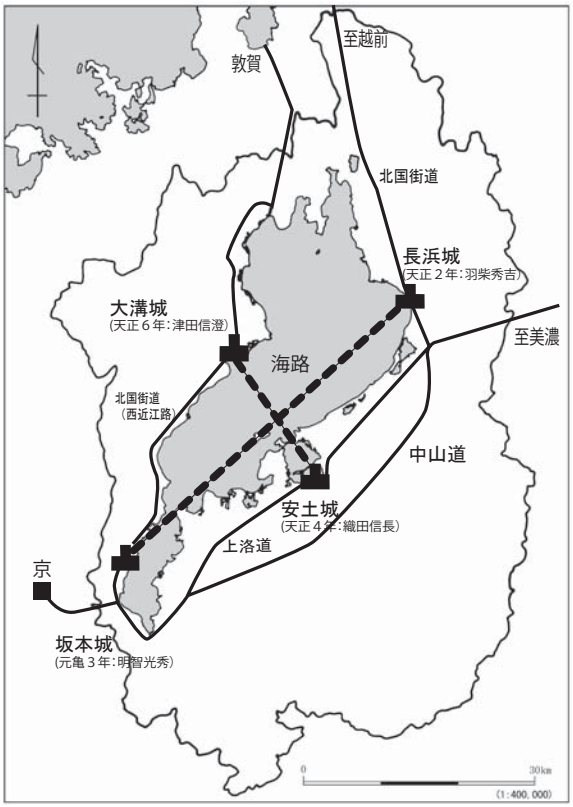
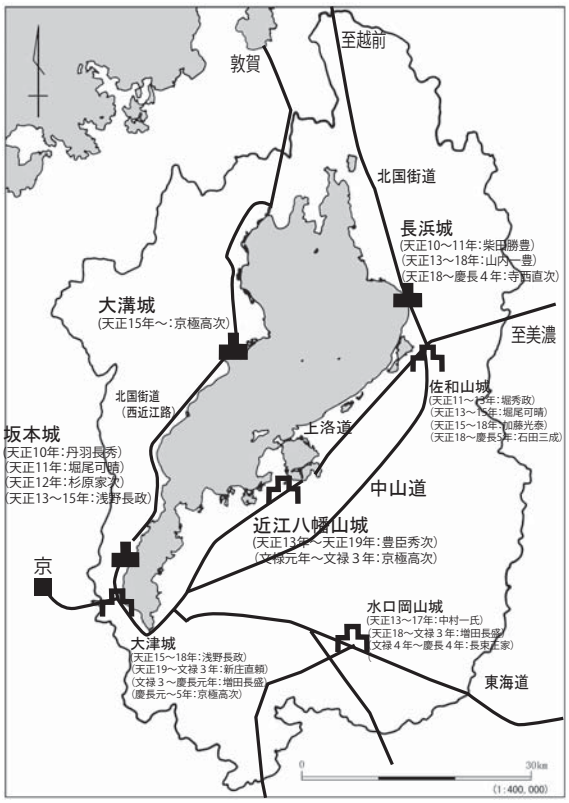
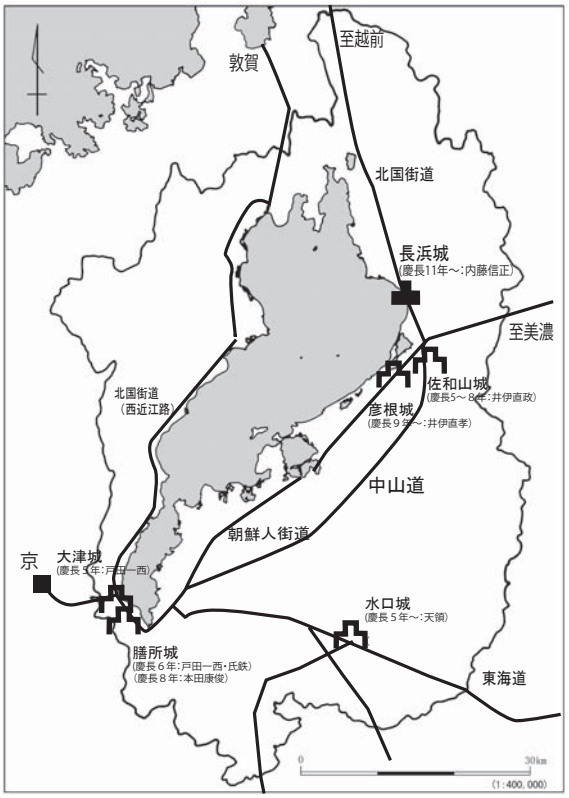


図１　信長政権下の築城



秀吉政権下の築城



家康政権下の築城

図２　築城変遷図

のは、建武年間に生存していた美濃部兵衛三郎元茂である。この後、長享元年（1487）頃の名を記した『佐々木南北諸士帳』の美濃部源吾を始め、大永３年（1523）を初出に、元亀４年（1573）迄の期間の山中家文書の中に見える美濃部茂（重）国、美濃部六右衛門尉、美濃部茂在、美濃部茂良、美濃部茂濃、美濃部治茂など、系譜は明確ではないが「茂」の諱を持つ一族の存在をうかがい知ることが出来る。おそらく、この期間が最も美濃部氏が甲賀郡域で在地領主として活躍していた時期と考えられる。特に、永禄８年（1565）の山中氏・伴氏・美濃部氏のいわゆる柏木三家としての同名中の起請文は、地域的結束の形として位置づけられるものである。後に、甲賀二十一家、五十一家として位置づけられるほど、郡中惣の中の甲賀武士として大きな役割を果たしていたことは明白である。これらの状況から、鎌倉時代以降戦国期にかけて、美濃部氏は美濃部郷を支配していた、いわゆる甲賀武士の同名中であることは間違いがないところである。

信長の近江侵攻後は、元亀４年で文書類が途切れていることでも、その名が織田方として出てくることでも、美濃部茂濃・地茂は金指物番として信長の配下に組み込まれており、信長の家臣であることは明白である。さらに、そのまま豊臣秀吉の家臣ともなっている。周知の通り、甲賀衆は天正13年（1585）に最終的に秀吉の勘気に触れ、惣中が改易され帰農させられてしまう。茂濃は天正10年（1582）の本能寺の変の時に、世に言う「神君、伊賀・甲賀越」により、徳川家康を伊勢白子まで逃がした人物として名を残す。その功により、慶長５年（1600）に甲賀衆全体が赦免される。この間の記録が途切れるのも頷けるところである。

（３）美濃部氏居館の位置と構造

それでは、美濃部氏はどこに居館を持って、領域支配をしていたのであろうか。記録では、郷長の屋敷は「字梅ヶ畑」である。そして、美濃部氏の館は「字武島」とされている。現在のその位置は現水口城の位置、城の真下であったことがわかる。鎌倉から戦国期にかけての美濃部郷の中心地は、現在の水口の中心は水口城とその東隣であったことがわかる。中世時代の城もしくはその位置を戦国時代以降に利用することはしばしば見受けられる。それは戦略的にこの場所が重要な位置を占めていることを物語っている。この位置は、南北に近江八幡街道から信楽街道が、鈴鹿峠から横田の渡しへと街道が走る結節点に当たる位置である。野洲川にもほど近く、交通の要所として人の往来と地域を抑えるには格好の場所であったといえる。

さて、美濃部氏の居館が近世水口城で破壊されていることが事実であれば、居館はすでに破壊されたことになり姿形を明確にすることは困難である。ただし、類推することは可能である。それを考えるヒントとなるのが、同じ柏木三家のひとつである植城の存在である[5]。植城は、一族郎党の居館が連なったと考えられる複郭式の城館群（200m×約300m）を中心として、その外に出屋敷である方形城館（約50m四方）が付く形となることが近年の発掘調査等で判った。（図3）同じような地域的な位置関係と領主クラスの格からすると、同じような形態の城が考えられる。

ここで問題となるのが、美濃部氏居館とは別に、それよりも南東にずれた位置に存在したと伝えられている「水口出屋敷」という方形居館の存在である。水口出屋敷跡については「美濃部出屋敷遺跡の調査」[6]に詳しい。（ただし、残念ながら平成13年度版『滋賀県遺跡地図』には、遺跡として周知されていない。）出屋敷の位置は、水口城の西、「字八光」の位置である。報告によると、南正面、信楽街道が90度東に曲がるあたりに「木戸口」であったとされ、さらに左折して北上する八幡街道から慶長期の東海道、八幡宮までを北限とする方40m四方の敷地とされている。現況では前面の道からの平坦地が東海道で屈曲していることが分かる。土塁は東側の八幡街道沿いと西側の水口高校側の一部に、近世に小家臣団屋敷に分割されたにもかかわらず破壊されず近年まで残存していた。また、郭内は井戸の痕跡も認められている。また、水口高校の周囲にも土塁が残存している。布袋塚と呼ばれる塚も位置的に見て土塁の一部と考えられる。現在の梅ヶ丘辺り一帯が梅ヶ畑にあたり、美濃部一族の代々の屋敷が建ち並んでいた場所である。さて、美濃部氏の館を利用して水口城を築いたとするならば、その規模は、40～50m四方と考えられ、これらふたつの屋敷と隣接した関係になる。近世水口城の方角と美濃部出屋敷遺跡の方位が一致することを考えると、もとの美濃部館もその方向が一致すると考えられる。つまり、この辺り一帯に美濃部氏の居城が植城のような連結した城館群として存在していた可能性は高いと判断されるであろう。

以上のこれらの関係を示したのが図３、４である。今後の精密な調査の手がかりとなすべく問題提起した。

さて、この地が織豊政権下でどのように扱われたのかが次の問題である。

３．豊臣政権へ、水口岡山城の築城

（１）織田政権下の近江の城と甲賀

豊臣政権下での状況を考える前に、まず、豊臣政権下に取り込まれる以前の織田政権下での甲賀郡の扱われ方について、おさらいをしておきたい。

近江に侵攻した信長は、元亀３年（1572）に明智光秀に命じて坂本城を築かせた。天正２年（1574）には羽柴秀吉に命じて長浜城を、天正６年（1578）には津田信澄に命じて大溝城を築かせた。そして、自らは天正４年（1576）に安土城を築いた。これらのことは、よく知れられているとおりである。これらは、いずれも琵琶湖に面した湖城である（図2）。一時的な付け城は別として、基本的に信長は内陸部での築城はしていない。築城位置から、信長の地域拠点の位置づけが考えられるところである。このことが信長

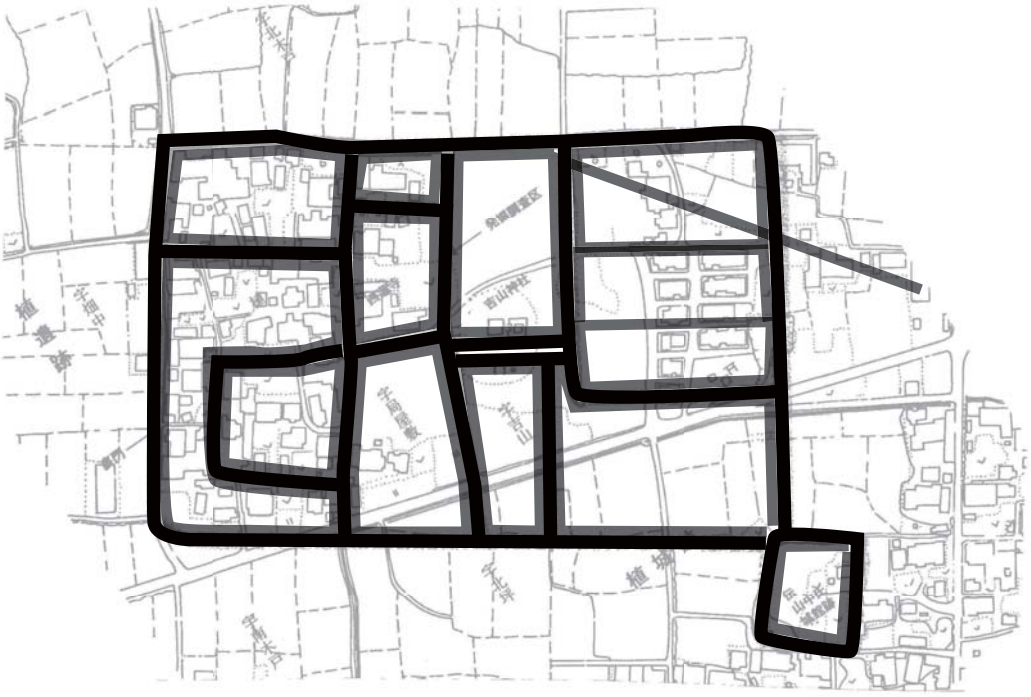


図３ 植城遺跡の縄張り

堀推定位置
土塁推定位置

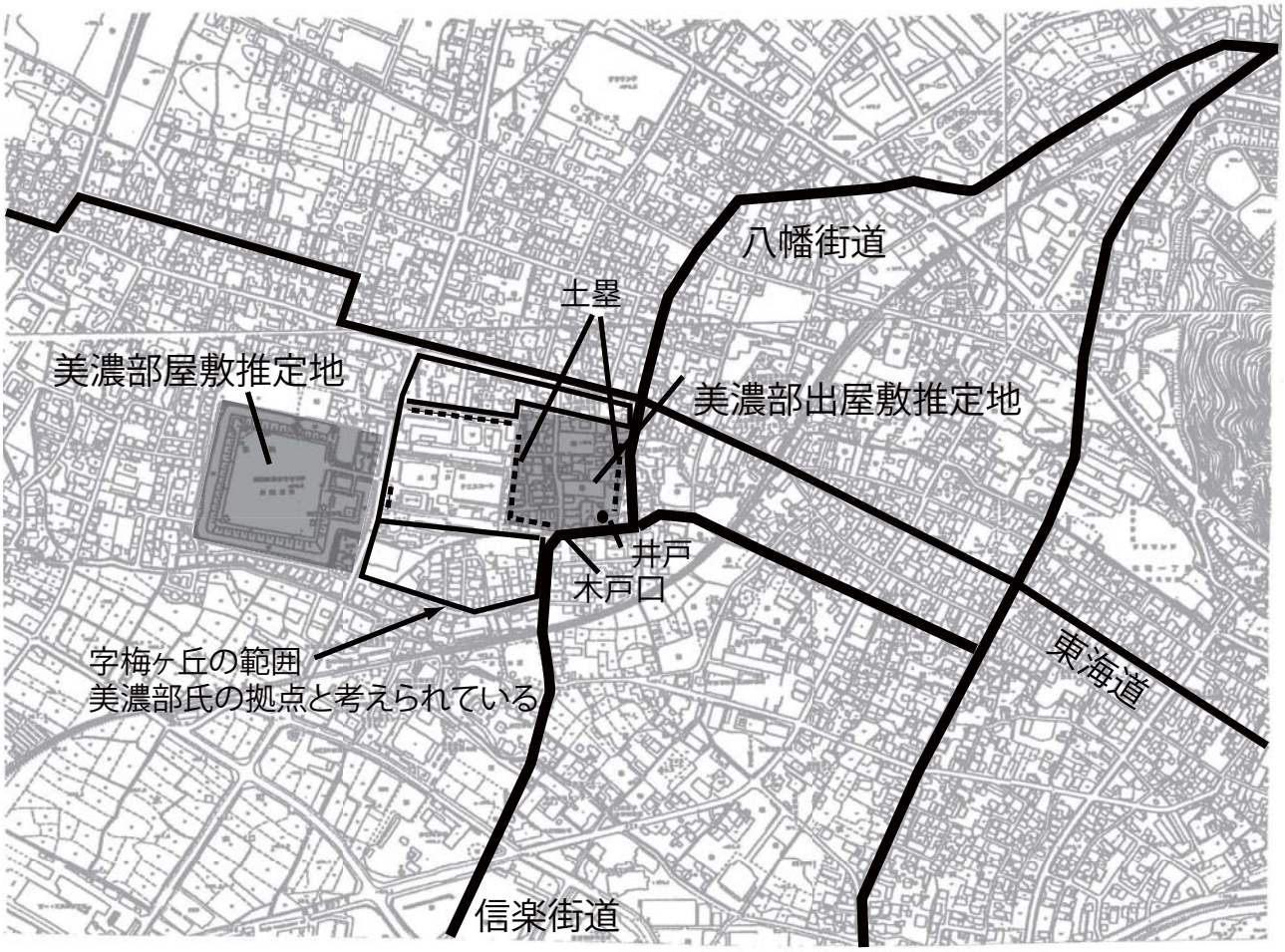


図４　美濃部氏関係城館推定位置図

の甲賀への意識や扱いに現れていることは以前に述べたとおりである。

織田軍侵攻以前から、甲賀郡には守護六角氏の横領や伊賀惣国一揆などの仮想敵があった。仮想敵としたのは、現実的にはいずれも甲賀郡を左右するような戦乱とはなっていないからである。地域的小競り合いはあったにせよ、基本的な在地領主を中心にした安定した惣自治が行われていた。彼らにとっての織田軍の近江侵攻は、確かに大きな不安要素であったと考えられるが、信長の甲賀への介入は迅速であった。一部、野洲川口や石部などで小競り合いはあったものの基本的に甲賀郡内での織田軍との大規模な戦闘行為は無かった。その後、惣中の解体もなく、豊臣政権以後へと多くの武将が生き延びていることを考えると、基本的な枠組みとして在地支配にも大きな変化はなかったものと考えられる。織田政権下での甲賀郡への介入は無く、その結果として築城もなかった。結局、「美濃部上総介茂濃」が、信長の家臣となっていることでも、美濃部氏はその後を生き延び、彼らの領地と城館群は破城されることなく存続していたものと推察される。

（２）水口岡山城築城の時代背景

【天正 10 年～天正 12 年】

中世的世界としての甲賀が破壊されるのは豊臣政権下になってからである。本能寺の変による織田信長の死後、羽柴秀吉は急速に近江内外の治世を進めていく。秀吉は信長の築城政策をなぞるような形で進めたが、新しい変化も認められる。それが秀吉の築城政策とともに明確な形で現れている。（図2）

天正10 ～ 12年の近江の状況は次のようであった。まず、焼失後の安土城には、織田氏の居城として信長の孫に当たる織田信秀が入城する。坂本城には丹羽長秀→堀尾可晴→杉原家次と信長の家臣から、秀吉の家臣から血族へと城主を代えている。長浜城は柴田勝豊･青山宗勝が城主となる。佐和山城には丹羽長秀に代えて堀秀政が入る。大溝城には津田信澄に代わって加藤光泰を経て生駒親正が入った。そして、肥田城には蜂屋頼隆を経て長谷川秀一が入る。この時点では、秀吉が政権を取ったわけではない。そのため城は織田段階のものをそのまま踏襲して使用していることがわかる。ただし、城主は豊臣系の武将に代え、城を改築して地域支配にあたろうとしていることがわかる。新たに勢力拠点として重要視したのは内陸部の佐和山城と肥田城である。秀吉は湖上路だけではなく、街道にも目を向けようとしていたのである。

【天正 13 年～天正 17 年】

秀吉が近江の地で政権を不動のものとしたのは、近隣の政敵を滅亡させて、関白となった天正13年である。ここで情勢は一変する。まず、織田氏の居城であった安土城が廃され、その隣に、後継者である豊臣秀次・田中吉政を城主とする近江八幡山城が築かれた。坂本城は浅野長政が城主となるが天正15年に廃され、代わって長政により大津城が築城される。長浜城には山内一豊が入り、佐和山城には堀尾可晴が入る。大溝城は生駒がそのまま城主で、肥田城は廃城となる。大きく城主が変更になる。これらから、秀吉は血族もしくは豊臣子飼いの城主を重視している様子がわかる。しかし、支配の中心をなす城の位置は、坂本城が大津城に移転するが琵琶湖を中心とした織田段階との在り方と基本的に変化はない。ただ、一点だけ大きな変化があった。それが新たに琵琶湖の内陸部の奥深くに築城された水口岡山城の存在である。秀吉は近江支配における甲賀郡の中心である美濃部郷の重要性を、ここではじめて認識したのである。おそらくそれは、郡中惣としての甲賀武士団の規模と意義、交通の要衝の意義をあらためて見過ごすことの出来ないものとして認識したに他ならない。

織田政権下では甲賀郡の自治組織は安堵されていたものと考えている。その状態は秀吉段階にも継続されていたはずである。甲賀郡中惣が改易となるのは、天正13年３月末から４月はじめの紀州根来攻めでの秀吉による責めである。その様子はこうであった[7]。「かの太田の堤には、毎日御動座あり。一日、甲賀の輩、普請に忽緒をなす。殊に法度の旨を背くの条、その科少なからず。故に領地を召し離され、一類悉く流罪に行なはれる。当日また、明石与四郎則実致すところの普請、分限に過ぎね早速出来、感悦の余り、一万石領地を遣わすものなり、科を罰し、功を賞すること、頓にして、かくの如し、威を重んぜずんばあるべからず。ひそかにこれを監るに、甲賀の士卒、常に不善を致す。」と、表向きは紀州攻めでの太田堤の普請工事への責めがその主な理由である。しかし、それは実は口実に過ぎなかったのではないであろうか。「甲賀の士卒、常に不善を致す。」と、「常に」にその意図が現れていると見ることができる。近江から大和や伊勢、紀伊をつなげる甲賀郡の不穏な動きにこそ、その意図があった考えられる。

結果として、郡中惣は全域が領地を改易され甲賀武士は全員帰農させられてしまう。後に赦免となるのは徳川段階になってからである。

その結果、豊臣政権の意思表示として行われた地域への介入として水口岡山城が築城されたと解される。

では水口岡山城とはどんな城郭なのであろうか。

（３）水口岡山城の築城から廃城まで

【天正 18 年～文禄４年】

水口岡山城の初代城主は中村式部少輔一氏であった。一氏は天正11年（1583）に岸和田城で初めて城持ちになった豊臣政権下子飼いの武将である。天正13年に築城を開始した一氏は、天正18年（1590）の小田原征伐に、二千の兵を率いて水口岡山城から参陣している。そして、山中城攻めで功をあげる。その恩賞として、その後の分国で駿河一国十七万石の府中城主に移封される。遠江への武将たちの移封は一氏だけではなかった。佐和山城からは甲府城へ加藤

光泰が、長浜城からは山内一豊が掛川城へ、佐和山城を経て堀尾可晴は浜松城へ、近江八幡山城からは田中吉政が岡崎城へ、豊臣秀次が清洲城へ、岐阜城からは池田輝政を吉田城にと、徳川関東移封に伴う囲い込み作戦の為、近江の子飼いの武将の移封が行われた。また、代わって長浜城には美濃本田城から寺西直次が、大津城の浅野長政が後瀬山城へ移封なり、代わって新庄直頼が入封する。佐和山城には石田三成が城主となり、代々甲賀武士である山岡氏の居城であった勢多城が廃城となった。

これらの布陣をみても、秀吉が、天正13年段階での近江支配が一段落して、天正18年からは主目的が変わり、残る敵徳川家康に目が向けられたことがわかる。秀吉は支配後の領地にまず、勇猛果敢な武将、築城に長けた武将を据えて治世を始める。後に、彼らを次の赴任地に向かわせ、城下町経営の出来る武将を配置するのである。

そして、結果として水口岡山城には、増田長盛が赴任した。長盛は尾張出身とか近江国浅井郡益田郷出身といわれているが定かではない。羽柴段階からの家臣である。天正12年の小牧長久手の戦いで戦功をあげ二万石となり、従五位下右衛門尉となり、政権下では五奉行に任ぜられた重要人物である。ここ水口岡山城主六万石がもっとも最初の持ち城となる。得意分野は法令、訴訟、土木工事で、彼は武人ではない。文禄元年からの文禄の役にも軍功を立て、大津城を経て、文禄４年（1595）には二十万石で大和郡山城へ移封となっている。

さて、文禄４年という年も近江の城郭にとっては変革の年であった。秀次事件とともに近江八幡山城が廃城となり、天正18年から城主であった京極高次は大津城に移封となったからである。

（４）水口岡山城と山下町の構造

では、ここで豊臣段階の城と町、水口岡山城と山下町について考察してみたい。

①築城にまつわる伝承

まず、築城にまつわる伝承である。築城に際して、大溝城の建物や石垣、三雲城の石垣が用いられたという伝承がある。建物については、移動を証明する文献を認めることが出来るが、石垣についてはこの伝承は怪しい。ひとつは、いずれも現地に石垣が残されており、解体され運ばれた痕跡が現地に認められないからである。特に三雲城の大きな矢穴のある巨石石垣は、水口城廃城後に築かれた石垣である可能性が高く、天正13年以前に三雲城が石垣作りであったとすることには賛同できない。三雲城の石垣は水口岡山城築城と同時か、もしくは築城後に築かれた可能性がある。

②縄張り構造から

水口岡山城は織豊期城郭らしく平山城として築かれている。しかし、その構造は織豊系の城として特徴的である三方尾根としていない。城は山頂の縦長の一本尾根に築かれ、尾根に直行する堀切で郭を分断する形をとっている。その構造はむしろ、京極氏の居城上平寺城や浅井氏居城小谷城など、信長が近江に侵攻する以前に築城された山城の縄張りに酷似するのは一目瞭然である（図5）。形態からみれば、同時代の近江八幡山城の構造から考えても、豊臣政権下での新規築城とは考えにくい。尾根を堀切で切断し、山頂部に同じような幾つかの郭群を配する点、先端や背後の斜面に竪堀群を配置したり、縦土塁を置くなど、基本としているのは中世山城の形態である。近似する形態の山城群が16世紀前半であることから考えても頷けるところである。

反面、織豊系城郭としての特質も認めることができる。まず、南正面中央に認められる枡形虎口（A）（図６）である。現在は登城ルートが変わってしまっているが、城全体、城と町との位置関係から、ここが当時の正面、大手口であったと考えて間違いないであろう。枡形虎口は織豊系城郭の象徴のように考えられている。また、同じようなものとして、北側の帯郭の遮断としても、後付けで土塁の食違いによる枡形が用いられている。いずれにしても、織豊系の枡形が用いられているのはこれらの部分だけであるが、この城が織豊系の改変を受けていることの証明となる。また、織豊系城郭の三種の神器としての「天守・石垣・瓦」も認めることができる。まず、石垣は破城を受けているため全体像は明確ではないが、現地で確認した状況では、本来は切岸として法面であった主郭部のみに構築していたことをうかがわせる。瓦は各郭の入口門もしくは隅櫓に用いられていたと考えられ、そのような位置に散布が認められる。現況ではその使用は限られていたものと考えられる。歴代城主の地位からみても、金箔瓦や鯱瓦、桐紋・菊紋の存在も推定できるところである。また、天守台の存在は推定で、現地での明確な天守台としては認めることができない。今後の検討が必要であろう。これらを総合して考えると、もともとあった中世山城を天正13年に織豊系城郭として改変したとするのが妥当かもしれない。もし、前段階に山城が存在していたならば、それは美濃部氏の詰城であった可能性が高いといえる。

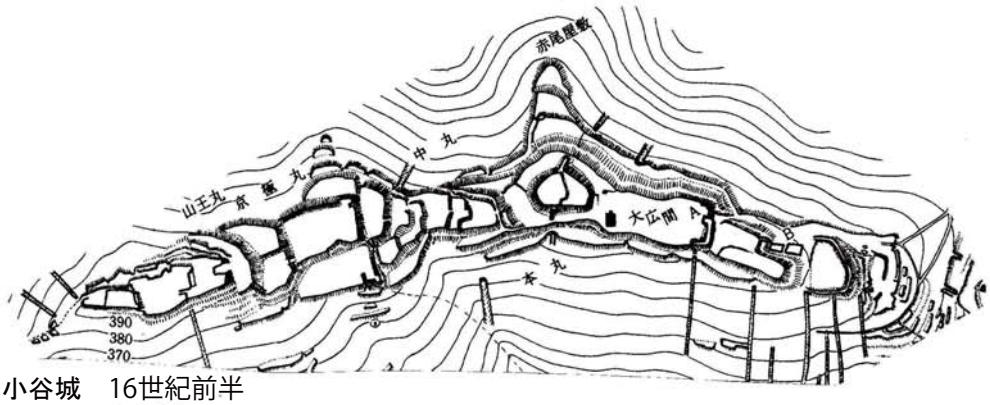
いずれにしても、学術的で詳細な発掘調査が待ち望まれるところである。実施されれば、天守の構造と位置、石垣普請の全体像、礎石立建物の位置と構造などの織豊系城郭としての特質がより明確に位置づけられると考えられる。

いまひとつ、縄張りから特徴的な構造が見受けられる。それは町側に面する面に小規模な突出する郭群（★）（図６）である。これはさながら戦艦大和の側面に備え付けられた副砲群を思い起こさせるものである。

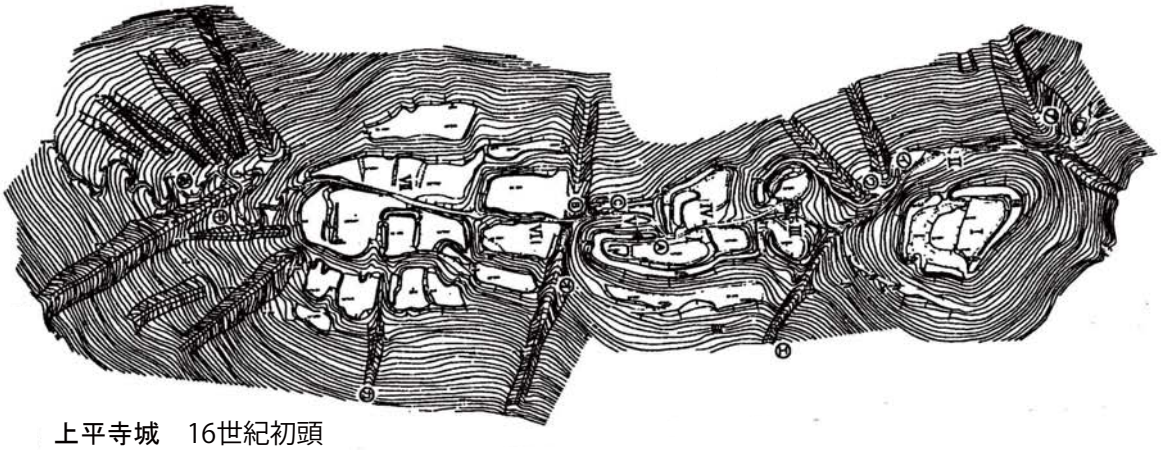
③山下町の構造

山下町については、その後東海道の宿となる水口宿としての意識が強く、これまで天正期の町として言及されることがなかったように見受けられる。

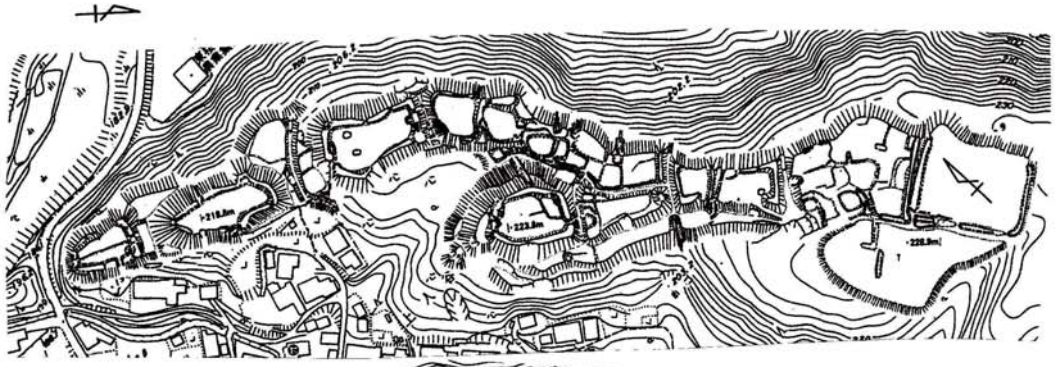
しかし、水口岡山城の足下に広がる町屋部の形態は、山



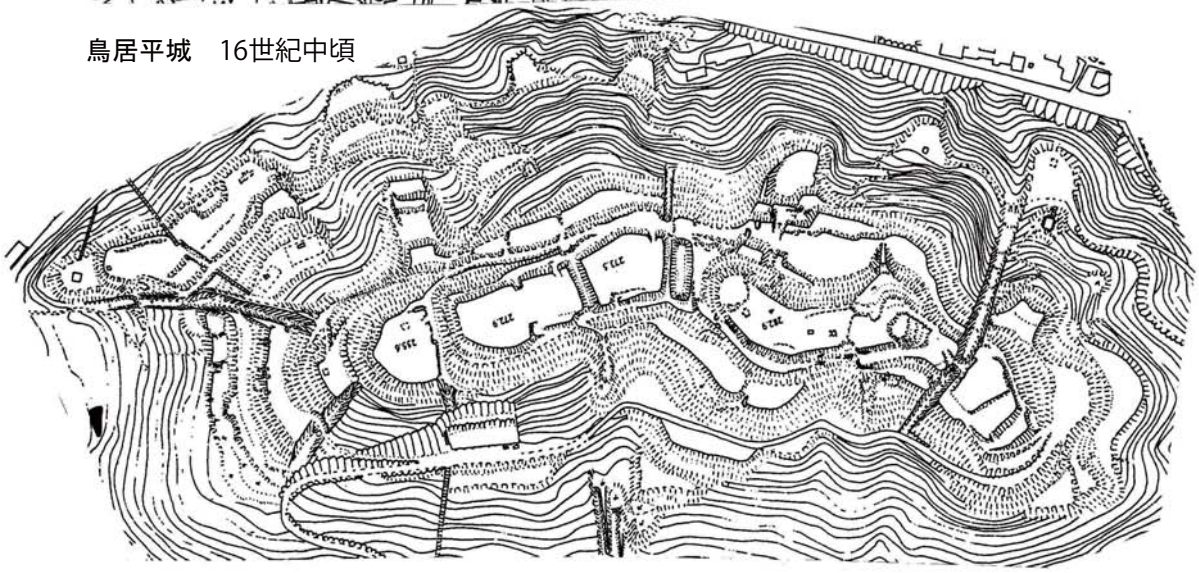
小谷城　16世紀前半



上平寺城　16世紀初頭



鳥居平城　16世紀中頃



水口岡山城　天正13年（1585）

形態比較のためスケールは統一していない

図５ 縄張り形態比較図

図６ 縄張りから見たに水口岡山城
（「近江の山城」サンライズ出版から転用高田徹作図を加筆）

と町の位置関係から見ても、町自身の形態から見ても、そっくり天正13年段階の町割りがそのまま残っているとしてよいと考えられる。

まず、町の範囲と規模である（図7）。

現在の水口岡山は周囲が開発により破壊されているため正しくはない。元の山の端は図示した範囲である。

地元の方の話によると、町側の山の端には石垣積みの堀が巡っているところが近年まで残っていたと言われる。また、昭和27年頃の米軍の航空写真にも堀を埋めたのではないかと考えられる帯状に長い敷地を山の周囲に認めることができる。これらのことから城を巡る内堀があった可能性が出てきた。さらに想定内堀に結合するように、現在も町を囲う堀（水路）を認めることができる。図では波線で示しておいた。これらが惣構えになる可能性がある。

山下町はその内堀に接するような位置、城の南面に広がっている。形態は東西に長いラグビーボールのような形をしている。東の端は、近世では水口宿の「東見付」となっているが、広義には、さらに東に寄った山川橋を越える橋と考えられる。西の端は、現在も堀を越えるために掛けられている「石橋」（地名として残っている。）である。城と町屋との境を流れる堀が石橋を経て水口神社を廻り、野洲川へとまわっている。おそらく豊臣期の町屋部は現東海道の両脇２通り分（現在の元町・京町・本町）だけであろうと考える。

山と町の中軸線上に、大岡寺（天台宗）がある。大岡寺は、開基が白鳳期で行基とされる古刹である。もともと岡山に伽藍と房舎16院があったとされるが、城を築くにあたり、南方の「字地頭」に移転させられたという、水口城主加藤氏段階の祈祷所として、現在の位置に移転したのが正徳５年（1715）であることを考えると、城の大手筋や町屋部との位置関係から見て水口岡山城段階の下屋敷と考えて間違いがないところであろう。また、町屋部と推定の山端との間に、堀に囲まれたとおぼしき空閑地が認められる。位置的にみてここが家臣団屋敷になるのではないであろうか。

さて、このような状況の中、豊臣家は崩壊を迎え、徳川の時代へと政権は転換していった。

４．徳川政権と水口城

（１）水口岡山城の廃城

文禄４年、増田長盛に替わって、水口５万石（のち12万石）の城主となったのは、長束正家である。長束は近江国栗太郡長束村の出身といわれ、当初、丹羽長秀に仕えていたが、天正13年に豊臣秀吉の奉公衆となり、豊臣氏の蔵入地の管理や太閤検地で力を発揮した治世を得意とし、政権下で五奉行として活躍した武将である。慶長３年、豊臣秀吉は没する。豊臣政権を維持しようとしたのは、佐和山城主の石田三成である。水口岡山城主の長束も五奉行であったため、豊臣方に与していた。慶長５年（1600）、長束正家は前田玄以などとともに五奉行の連判で家康を弾劾し五大老を擁立して挙兵する。関ヶ原の戦いでは毛利秀元・吉川広家とともに南宮山に布陣した本戦に参加できず敗走し、水口城を目前に池田輝政・長吉に包囲され自刃した。城はそのまま池田長吉の預りとなったが戦後処理として廃城となった。

（２）水口城の築城

関ヶ原合戦後、水口は徳川家の直轄地となり、東海道の宿場町に指定された。家康もしばしば立ち寄っていたようであるが、三代将軍家光が、寛永11年（1634）の京都上洛にあたり水口に宿所を築かせた。これが水口御茶屋御殿とよばれるもので、現在の水口城の前身となるものである。前史が正しければその地は美濃部氏の居館が存在していた場所である。築城は幕府直営で、作事奉行には小堀遠江守政一があたった。城は、慶長８年（1603）、家康が、京都守護として上洛の折りに宿所として使用するため造営され、家光により伏見城の遺構を移し、寛永３年（1626）に完成した二条城は、の御殿を模したものであったといわれている。しかし、この御殿が将軍の宿所として使用されたのは、家光上洛のこの１回限りであった。その後、城は幕府直轄の城として城番となった。道路を重視していた豊臣政権以後の考え方が、これらの築城の意義を示している。そして、天和２年（1682）からは城番では無く、加藤明友２万石で入城し水口藩が成立した。一時、鳥居氏が藩主となったが、再び加藤氏が２万５千石で藩主となり加藤明実までの11代で幕末に至る。立藩したとはいえ、依然、城は徳川家のものであり、藩では二の丸を使用し、本丸御殿は使用しなかったらしい。

（３）水口城と城下町

水口城の位置は前述したとおりである。中世以来の地域的に重要な位置を占めている。城は平城で水堀で囲まれた本丸御殿のある本丸と出丸による二郭で構成されている。本丸は徳川特有の方形を呈し四隅に櫓を持つ。出丸は本丸の東の南北道まで張り出している。馬出し状の外枡形であるので、ここが城のお成り門と呼ばれており、ここが城の正門となる。門は本丸の北側、二の丸から東海道に直結する北側にもある。近世の絵図では、この本丸とその廻りの敷地を広く囲う様に、南の堀側を柵で、後の水口藩政庁部である北側の二の丸と東海道を屈曲させて作った町屋部との境を塀で境をして、複郭としている。城境には６つの門がもうけられている。二の丸とその周辺には城主の御殿、藩の主要建物、武家屋敷など建てられていた。町屋部は主に東海道筋を中心に広がっており、北部に中心を持っている。これらの近世水口城下は「西見付」と呼ばれる堀と堀にかかる橋の位置を西端とし、町屋部の北側を大きく迂回する掘割水路が、豊臣段階の町屋部の石橋を東の限りとし水口神社の北側から、城の南面へと走り囲っている。この範囲が近世水口城惣構えとして判断できる部分である。

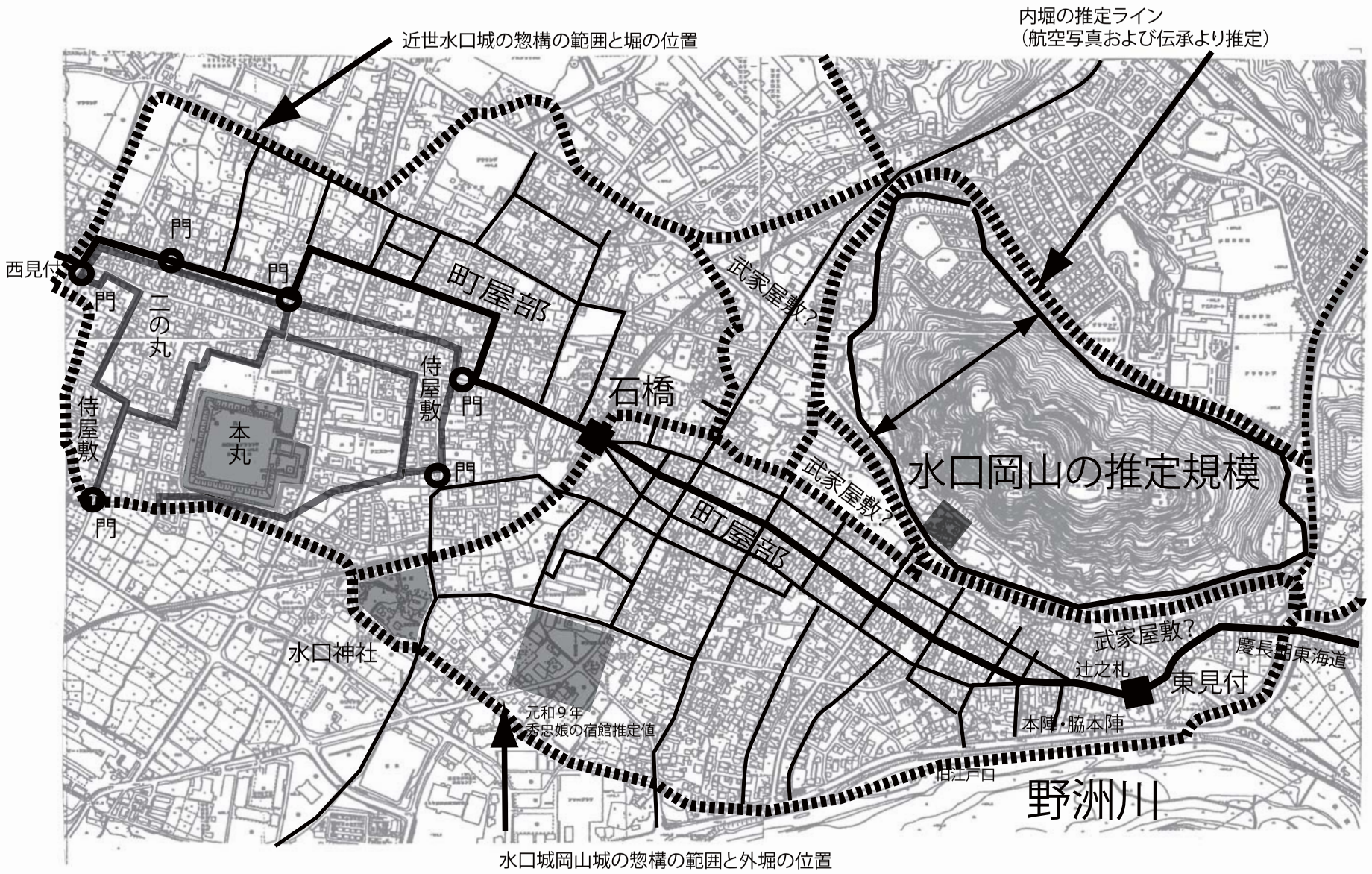


図７ 水口岡山下町と水口宿の全体図

水口は近世水口城下町と水口宿との二面性で論じられる場合が多いが、本来的に見れば水口岡山の山下町が先に存在しており、近世になって、元の美濃部郷の中心地であった場所、美濃部城に水口御茶屋御殿が築かれ、街道周辺が水口宿として指定され、さらに水口藩が立藩されたことにより、近世的な二面性をもつ町と位置づけられたに過ぎない。つまり、豊臣政権下の旧来の町が存続するか、させられたために二面性をもつようになったと解することができよう。これは旧来の町衆の力そのものがそうさせたのかも知れない。本来的な意味での二面性は豊臣期・徳川期のふたつの城と城下が結合して新たなひとつの町となっていることとして判断できよう。

このように、水口は平和な時代の産物として移行しつつあり、将軍の泊所という性格から、藩の政庁として、栄える宿場町の町のシンボルとして存在するだけになっていったのである。

城と言う意味で最も機能していたのは、位置からみても、豊臣期の水口岡山城とその山下町であることは間違いがないところであろう。

6．おわりに

中世にあって甲賀郡は、強固な自治組織で防衛されていた。しかし、40万を超える織田軍にとっては、これら平地居館など、目の前の塵に等しかったことであろう。信長は世に言われているほど自治組織、惣中に対して大きな圧力をかけてはいなかった。甲賀武士団の多くも、信長の圧力を感じてか、処世術からか、早くより織田政権下になびいている。甲賀武士団柏木三家の同名中、美濃部茂濃もそのような武士の一人である。信長の城作りは琵琶湖を中心としたものであり、内陸部には城を築いていないことからも、眼中になかったようである。政権的に甲賀郡に目を向けたのは豊臣秀吉である。秀吉は甲賀という古代以来の交通路としての地域の重要性、甲賀武士という地縁血縁の強さを感じていたに違いない。ほとんど難癖ともいえるような秀吉の勘気を被り、天正13年という節目の年に、ついに全ての領地が召し上げられ惣中が改易されてしまうからである。その結果として、天守と石垣を備えた水口岡山城をその中心地に築城した。それは織豊政権の介入のシンボルともいえるものであった。

このシナリオは、東海・中部・北陸・四国・山陰・九州の各地で、信長が行ってきた「天下布武」による国盗り、秀吉がおこなってきた「天下統一」による分国政策として一ページを飾るのと同じものである。

徳川政権での水口の在り方を見て、この地域での諸城の重要性があらためて浮き彫りになったのではないかと考える。その出発点は、美濃部氏居館にある。彼の屋敷の伝承が正しければ、織豊政権が見向きもしなかった中世以来の美濃部郷の中心、美濃部氏の城館の跡地に徳川幕府は再び平城として城を築いたことも、今も水口の中心たることを考えてもその重要性が理解できるであろう。しかも、豊臣政権下の岡山城は利用しなかったにも関わらず、その山下町は取り込まれて生き延びた。秀吉段階も含めて、これらの城が築かれた位置そのものに重要性と価値が在ったことがわかるであろう。

その価値とは、この地に古代から走り続ける街道以外の何ものでもないだろう。そもそも甲賀武士の本務は、関や国境の「鈴鹿警固」、街道などの「路次警固」が主な任務であった。秀吉は伊勢から近江への進入をおそれて岡山城を築城した。家康は堺から逃れる中で伊賀・甲賀の重要性を認識していた。それは江戸と京を結ぶ大切な基幹道の一部であったからである。近世水口城は戦闘目的の城ではないことは周知のことである。御殿だけがあり天守はない。

「天下静謐」となった徳川政権下での必要な「場」、天領として支配的な要として位置づけられ、築城された城である。かれらもしっかりとこの重要性に気づいてのことであろう。甲賀郡の中世的な世界の終焉を秀吉が行い、近世的な世界として位置づけを家康が行ったにもかかわらず、潜在的な土地が持つ価値は変わることはなかったのである。

これらの一連の歴史的流れを物語る地域として、水口の存在は特質すべきものをもっていると考えられる。しかし、いずれの時代の城も、城としての歴史的価値が損なわれているのが現状である。あらためて、見直される時期に来ているのではないであろうか。本稿がその契機となる一助となれば幸いである。

（きど まさゆき）

註

⑴『滋賀県中世城館調査報告』１～10　滋賀県教育委員会　1984～1994

⑵木戸雅寿「甲賀の城のネットワーク」『紀要』19　（財）滋賀県文化財保護協会　2007

⑶木戸雅寿「織豊期の甲賀-焼き討ちはなかった-」『紀要』20　（財）滋賀県文化財保護協会　2007

⑷水口町志（下）水口町志編纂委員会　1959

⑸木戸雅寿・小島孝修　ほ場整備関係（経営体育成基盤整備）遺跡発掘調査報告書33-2『植城遺跡』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会　2006

⑹神山隆之・荒居幸次郎「美濃部出屋敷遺跡の調査」『滋賀県中世城館調査報告』２―甲賀郡―　滋賀県教育委員会　1984

⑺「紀州御発向紀」『太閤資料集』戦国資料叢書１人物往来社　1965

参考文献

『甲賀郡史』　甲賀郡教育会　1926

中西利弘「甲賀水口の歴史と民俗」　1999

水口町立歴史民俗資料館「甲賀水口の歩みと暮らし」1996

編集後記

今回の紀要は、出土資料の紹介をはじめ、遺跡および遺構の新たな評価や再検討など多彩な内容となっています。これらには、近江の独自性が垣間見えるとともに、幅広い交流の歴史が反映されているようです。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っています。

（編集担当）

平成21年（2009年）３月

紀　要　第22号

編集・発行　財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732－2
Tel.077－548－9780（代）
http://www.shiga-bunkazai.jp/
E-mail:mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本　（株）図書印刷同朋舎